小学校通常学級において気がかりな姿のある児童が落ち着いて学習するための支援の工夫

――スマイルメモとあったかサポートの作成と活用を通して――

長期研修員　　下谷　真弓

《研究の概要》

本研究は、小学校通常学級において気がかりな姿のある児童が落ち着いて学習に取り組むようになることを目指し、「スマイルメモ」と「あったかサポート」を作成した。まず、学級全体の児童を不注意・多動性・衝動性の行動特性の視点で見取る「スマイルメモ」を活用して、学級全体の傾向を把握した。次に、不注意・多動性・衝動性の三つの行動特性別に支援をまとめた「あったかサポート」を活用して、適切な支援を取り入れた。

「スマイルメモ」のチェックシート全 18 項目の結果をレーダーチャートに表したことにより、担任などの観察に加えて学級全体の傾向を一目で見取ることができた。これを基にして「あったかサポート」を活用したことにより、気がかりな姿のある児童を含めた学級全体の児童への適切な支援を取り入れることができ、児童が落ち着いて学習する姿が見られた。

キーワード　**【特別支援教育　小学校　通常学級　障害の特性】**

群馬県総合教育センター

分類記号：Ｉ０１－０１　平成２６年度　２５２集

Ⅰ　主題設定の理由

国においては、特別支援教育を障害のある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち、「幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活上や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行うもの」（平成 26 年 12 月、文部科学省「特別支援教育について」）として定めた。通常学級を含めた特別支援教育の充実を推進している。

群馬県においても、特別支援教育を「障害のある幼児児童生徒（診断のあるなしにかかわらない）に限らず、学習上、行動上に困難を抱えるすべての幼児児童生徒を対象に、県内すべての学校で、一人一人の多様性を尊重し、その可能性を最大限に伸ばす教育としてとらえる。この考え方に基づいて特別支援教育を推進することは、障害のある子ども等への教育にとどまらず、すべての幼児児童生徒の教育の充実につながっていくものと考える」という理念の下、平成 25 年３月に「群馬県特別支援教育推進計画」を策定した。

平成 24 年の文部科学省の調査「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」では、通常学級において知的発達に遅れはないものの、学習上や行動上に困難を抱える児童生徒の割合は推定 6.5 パーセントであった。全体的に極端に学力は低くないが、周りから認知や行動上の特性を認められず、「やる気がない」などの非難を多く受け、自信や意欲を失ったり、自己評価が低くなったりして、適切な支援があればできることもより困難になってしまう様子が見受けられる。また、家族の育て方の問題として家族が叱責されたり、繰り返し練習すればできるようになるはずと厳しく対応されたりすることも多い。このようなことが原因で情緒不安定になり、学校生活の様々な場面で周囲の理解と適切な支援が必要とされている。一方、教師は一人一人が落ち着いて学習できるようにしたいけれども、学習への取り組みが様々であることから、どんな支援をしたらよいのか分からず、指導や支援への不安を抱えている場面が見受けられる。

このような現状から、気がかりな姿のある児童を含む学級全体の児童について、不注意・多動性・衝動性の三つの行動特性の視点から実態を把握し、それに応じて適切な支援を取り入れる必要があると考える。

そこで、本研究では小学校通常学級における気がかりな姿のある児童が落ち着いて学習に取り組むようになることを目指して、よりていねいな実態把握をするための「スマイルメモ」と、適切な支援をするための「あったかサポート」を作成するとともに、その有効性を探りたいと考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

本研究では、小学校通常学級における気がかりな姿のある児童が、落ち着いて学習に取り組むようになることを目指し、よりていねいな実態把握をするための「スマイルメモ」と、適切な支援をするための「あったかサポート」の作成と活用を通して、その有効性を明らかにする。

Ⅲ　研究の内容

１　基本的な考え方

(1)　気がかりな姿のある児童

本研究では、障害のあるなしにかかわらず、不注意・多動性・衝動性の三つの行動特性による学習上の困難を抱え、特別な支援を必要とする児童を「気がかりな姿のある児童」と捉えた。

具体的には、集中して取り組めない、忘れ物が多いなどの不注意、授業中に席を離れる、手足をもじもじするなどの多動性、がまんができない、友達とのトラブルが多いなどの衝動性に関する姿が見られる児童のことである。

(2)　落ち着いて学習に取り組もうとする姿

児童が落ち着いて学習に取り組もうとする姿とは、基本的な学習規律や分かりやすい授業によって、児童が安心感や満足感、達成感を実感し、意欲をもって取り組もうとする姿であると考える。そのためには、気がかりな姿のある児童を含む学級全体の児童の実態に応じた適切な支援が必要である。

(3)　研究構想図

2　先行研究とのつながり

岡山県総合教育センターによる「通常学級における特別支援教育の観点から見た学級経営・授業づくり」に関する研究では、子どもたちにとって、教室を安全で安心のできる居場所、「分かる・できる」を実感することのできる場所とすることが重要であると述べている。そのためには、特別な教育的ニーズのある子どもだけなく、すべての子どもにとって、一人一人が大切にされ、お互いが支え合う中で、落ち着いて暮らせる環境が整っていることや、得意な学習スタイルや情報処理の仕方が異なる子ども一人一人にとって、分かりやすい授業が展開されていることが大切であるとし、そのために必要な指導や支援のポイントがまとめられている。

3　教材の概要

(1)　スマイルメモ

スマイルメモは、チェックシート（表１）とレーダーチャート（図１）の二つの組み合わせで構成した。これまでの担任などの観察に加えて、通常学級に在籍する児童の不注意・多動性・衝動性の三つの行動特性とその人数、学級の傾向など、適切な支援を取り入れるために必要な学級理解と児童の実態把握をするものである。多忙な通常学級の担任でも、短時間で学級全体の傾向を把握することができるものである。

チェックシートは、群馬県教育委員会より示されている「特別な支援が必要な児童生徒のチェックリストの行動面に関する項目 A」を参考にして作成した。全 18 項目の内容や奇数番号が不注意に関する項目、偶数番号が多動性・衝動性に関する項目であること、a の「ない、ほとんどない」、b の「ときどきある」、c の「しばしばある」、d の「非常にしばしばある」の四つでチェックを行うことも同じである。本研究では、表１の☆のある二つの欄を付け加えた。群馬県教育委員会のチェックリストは、ある１人の児童を対象に行うが、本研究では、学級の傾向を把握するため、担任や教科担任などが学級全体の児童を対象に行う。全 18 項目について a から d にそれぞれ何人当てはまるかをチェックすることとした。

本研究では、学級の傾向を見取りやすくするために、チェックシートの全 18 項目の結果を表計算ソフトを使って簡単にレーダーチャートに表せるようにした。C の「しばしばある」と d の「非常にしばしば

ある」の人数が、それぞれの項目の欠けている部分として表される。レーダーチャートが丸く外側に広がるほど、気がかりな姿のある児童は少ないということになる。チェックシートの奇数番号の不注意に関する項目は、レーダーチャートの右側に表し、偶数番号の多動性・衝動性に関する項目は、レーダーチャートの左側に表した。右側に欠けている部分が多い場合は、不注意への支援が必要な児童が多いと見取ることができる。レーダーチャートの人数は、学級の合計人数を設定できるようになっている。

表１　スマイルメモ　チェックシート

（人）

No		a ない、ほとんどない	b ときどきある	c しばしばある	d 非常にしばしばある	☆c＋d	☆クラスの人数
1	1 学校での勉強で、細かいところまで注意を払わなかったり、不注意な間違いをしたりする						
2	2 手足をそわそわ動かしたり、着席していても、もじもじしたりする						
3	3 課題や遊びの活動で注意を集中し続けることが難しい						
4	4 授業中や座っているべき時に席を離れてしまう						
5	5 面と向かって話しかけられているのに、聞いていないようにみえる						
6	6 きちんとしていなければならない時に、過度に走り回ったりよじ登ったりする						
7	7 指示に従えず、また仕事を最後までやり遂げない						
8	8 遊びや余暇活動に大人しく参加することが難しい						
9	9 学習課題や活動を順序立てて行うことが難しい						
10	10 じっとしていない。または何かに駆り立てられるように活動する						
11	11 集中して努力を続けなければならない課題（学校の勉強や宿題など）を避ける						
12	12 過度にしゃべる						
13	13 学習課題や活動に必要な物をなくしてしまう						
14	14 質問が終わらない内に出し抜けに答えてしまう						
15	15 気が散りやすい						
16	16 順番を待つのが難しい						
17	17 日々の活動で忘れっぽい						
18	18 他の人がしていることをさえぎったり、じゃましたりする						

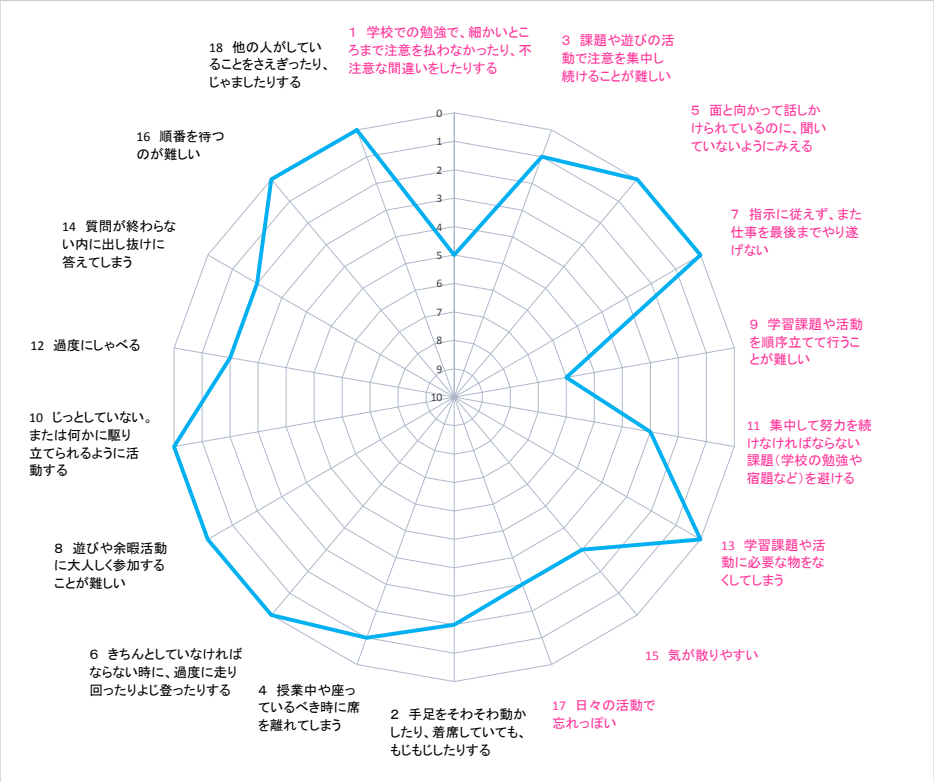


図１　スマイルメモ　レーダーチャート

(2)　あったかサポート

あったかサポート（図２）は、気がかりな姿のある児童を含む学級全体の児童が、落ち着いて学習に取り組むようになるために有効である支援を文献や経験からまとめたものである。

「基本となること」と「三つの行動特性への支援」で構成した。基本となることは、学級全体の児童への基本的な支援を「教室環境・気持ち・仲間意識・授業」の四つの項目でまとめたものである。児童が落ち着いて学習するようになるためのベースとして、常に心がけて支援したい項目である。

三つの行動特性への支援は、A 不注意・B 多動性・C 衝動性への支援をまとめたものである。基本となることに加えて、スマイルメモから見取った適切な支援を具体的に示したものである。A 不注意への支援は、「集中できない、ミスが多い、忘れ物落とし物多い、整理・整頓苦手」の４項目に分け、導入でフラッシュカードなどを使って気持ちづくりをするなど、それぞれに有効な支援を 33 個にまとめた。B 多動性への支援は、「そわそわもじもじする、授業中に席を離れる、きちんとすべき時できない、おしゃべりしすぎる」の４項目で、同一教科の流れを一定にするなどの支援を 26 個にまとめた。C 衝動性への支援は、「自分勝手に話す、がまんが苦手、人によくちょっかいを出す、友達とのトラブルが多い」の４項目で、自分勝手に話し始めたときにタイミングよく話しかけるなどの支援を 25 個にまとめた。また、４項目に共通して有効であると思われる支援を中心部の円の中にまとめた。

A 不注意・B 多動性・C 衝動性への支援では、チェックシートの項目番号を四角内に表し、項目番号からも支援を選ぶことができるようにした。数字は教師から児童への支援を表した。丸数字は児童同士のサポートで、周りの児童から気がかりな姿のある児童に対してできるようにしたい支援となっている。

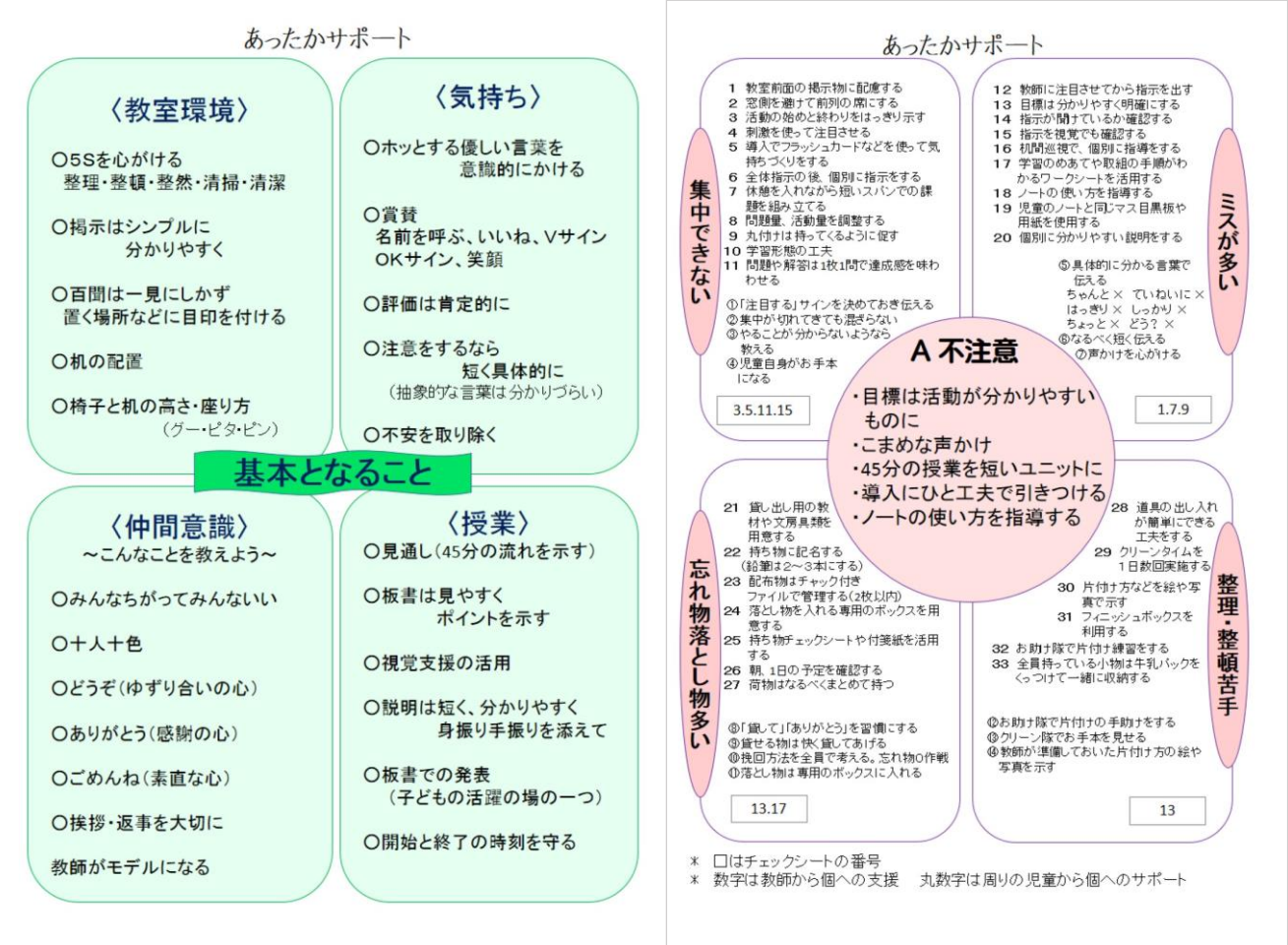


図２　あったかサポート

Ⅴ　研究の計画と方法

１　授業実践の概要

対　　象	研究協力校　小学校第４学年
実 践 期 間	平成 26 年 11 月 10 日～11 月 25 日　10 時間
単　元　名	算数　面積のはかり方と表し方「広さを調べよう」
単元の目標	面積について単位と測定の意味を理解し、面積を計算によって求めることができるようにするとともに、面積についての量感を豊かにする。

２　検証計画

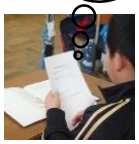
	検　証　の　観　点	検 証 の 方 法
スマイルメモ	チェックシートで、学級全体の児童を不注意・多動性・衝動性の三つの行動特性の視点で見取り、その結果をレーダーチャートに表したことは、学級全体の傾向を把握するために有効であったか。	・スマイルメモを分析する。 ・児童の変容を観察する。 ・担任から聞き取る。
あったかサポート	スマイルメモから見取った適切な支援（「基本となること」と「三つの行動特性への支援」）を授業中に取り入れたことは、児童にとってより分かりやすい授業になり、学習への意欲を高め、落ち着いて学習するために有効であったか。	・児童の変容を観察する。 ・ノート、ワークシート、発言などを観察する。 ・ビデオで撮影した児童の様子を分析する。

３　指導経過（全 10 時間）

時間	主な学習活動	あったかサポートの活用 基本：基本となること　A:不注意への支援 B:多動性への支援　C:衝動性への支援	評価とその方法
第1時 ～ 第2時	広さの表し方 ・いろいろな方法で面積を比べる。 ・面積の単位「平方センチメートル（㎠）」を知り、面積の意味を理解する。	単元全体で実践した支援 ・座り方の確認をする。（基本） ・学習活動の流れを示し、見通しをもたせる。（基本） ・拡大図や実物を用意し、興味・関心を高め、理解をしやすくする。（基本） ・具体的な言葉でめあてを示す。（A） ・フラッシュカードを活用し、授業への気持ちづくりをする。（A-5） ・ノートを持ってくるように促して丸を付ける。（A-9） ・ペアやグループ活動など、学習形態の工夫をして、全体での発表などが苦手な児童への配慮をする。（A-10） ・児童のノートと同じマスを用意し、めあてやまとめの書き方の見本を示す。（A-19） ・付箋紙やワークシートを活用し、１枚に１問の回答を書き、自分の考えを整理、把握できるようにして学習意欲につなげる。（A-17） ・机間巡視で声をかける時は目線を合わせて児童に安心感を与える。（B-5）	・フラッシュカードの活用により、授業に気分良く入ることができている。（観察） ・学習形態の工夫により、活動に意欲的に取り組もうとしている。（ノート・観察） ・視覚支援により、興味・関心が高まっている。（観察） ・ワークシートや視覚支援により、面積の意味が理解しやすくなっている。（ワークシート・ノート・発表） ・児童が安心して学習している。（観察）
第3時 ～ 第5時	長方形と正方形の面積 ・長方形や正方形の面積の求め方を考え、公式をつくる。 ・面積の公式を活用し、面積を求める。 ・複合図形の面積の求め方を考え、面積を求める。	・公式を用紙に書いて壁などに貼り示すことで、見て確認したり繰り返し学習したりできるようにする。（基本） ・児童による板書での発表で答え合わせを行い、児童の活躍の場を設ける。（基本） ・自分の考えを黒板に貼ることで、友達と考えを共有し、次の活動への意欲を高める。（基本） ・時計の模型を利用して、活動終了時間を具体的に伝える。（A-3） ・ワークシートを活用し、単位の書き方を繰り返して学習できるようにする。（A-17） ・問題を１問ずつ書いた用紙を用意しておき、線や図、式などを直接書き込めるようにする。（A-17） ・集中していることが難しくなってきたら、プリントの配布や整理を頼んで、その後、授業に戻れるようにする。（B-13）	・ワークシートや視覚支援により、より簡単に面積の公式を考えたり、長方形や正方形の面積を求めたりすることができる。（発言・ノート・ワークシート） ・活動時間を具体的に示すことにより、見通しをもって取り組み、集中を促している。（観察） ・児童の活躍の場を設けたことにより、意欲的に取り組むことができる。（ノート・発言）
第6時 ～ 第8時	大きな面積の単位 ・大きな面積の単位を知り、面積の単位の相互関係を理解する。	・実物大のものを用意し、大きさの感覚がつかみやすいようにする。（基本） ・ヒントボックスを用意し、問題解決の手がかりにできるようにする。（基本） ・学習形態を工夫し、一人一人の活躍の場を設ける。（A-10）	・視覚支援により、㎡、a、ha、㎢とその相互関係を理解しやすくなっている。（ノート・発言） ・学習形態の工夫により一人一人が活躍できている。（発言・ノート・活動）
第9時 ～ 第10時	まとめ ・学習内容を適用し、問題を解決する。 ・学習内容の定着を確認し、理解を確実にする。	・丸を付けたプリントは、黒板に貼り、児童が何番の問題をやっているか把握するとともに、児童の学習意欲につなげる。（基本） ・問題ごとにプリントにして配布し、１問できたら持って来るように促して丸を付ける。（A-9） ・分からないときは先生のところに用紙を持って来て、聞いても良いことを伝える。（A-20）	・プリントの活用により学習内容を適切に適用して、活動に取り組もうとしている。（観察・発言） ・黒板での発表により、児童の学習意欲につながっている。（ワークシート・観察） ・聞きやすい雰囲気ができている。（観察）

４　実践

めあて	辺の長さがｍの場合も、長方形や正方形の面積の公式が適用できることを理解する。(7/10 時)

主な学習活動	あったかサポートの活用・児童の様子
１　学習課題を把握する。 ○復習 ・面積の公式で使うかけ算の復習をする。 ・全員で一斉に答えた後、一人ずつ答える。 ○広いところの面積を求めることを知る。 ・「今日やること」を見て、学習活動を確認する。 ・書き方の見本を見ながら、課題をノートに書く。 ・面積の公式をペアで言って確認する。	A-５ 気分よく算数の授業を始められるようにフラッシュカードで気持ちづくりをする。 頑張るぞ もう、ばっちりだよ 基本 見通しをもって学習するために学習活動の流れを示す。 次は チャレンジだね。 
２　教室の面積を求める。 ○グループで必要な長さを測る。 ○個別で面積を求める。 ○黒板に書いて発表する。	A-17 活動の流れや手順が分かるワークシートを用意する。 ↓ ・ワークシートを確認することで、活動にすぐに入ることができた。 基本 児童の活躍の場をつくる。 ↓ ・ワークシートを貼る活動で、嬉しそうに前に出る児童が見られた。 ・友達やワークシートに関心をもち、集中する時間が増えた。
○グループで１㎡をつくる。	A-10 学習形態を工夫する。 A-③ やることが分からないようなら教える。 一緒にやろう 分かる？ 一人だと難しいけど、友達とならできるよ
３　まとめ ○書き方の見本を見ながら、まとめをノートに書く。	A-19 児童のノートと同じマスの用紙でまとめの書き方を示す。 ↓ ・なかなか書き始められなかった児童は、これまでよりも早く書き始めることができた。 ・ミスに早く気付き、直すことができた。

Ⅵ　研究の結果と考察

１　スマイルメモ

担任がチェックシートを活用して実態把握を行い、その結果をレーダーチャートに表した。それを考察したところ、課題や活動を順序立てて行うことが難しい（６名）、不注意な間違いをする（５名）、気が散りやすい、集中して努力を続けられない（３名）など、不注意への支援が必要であることが分かった。授業では、課題や活動に見通しをもつことができるように、学習活動の流れを示したり活動時間を具体的に伝えたりするなどの支援や、不注意な間違いを防いだり集中を促したりするために、視覚的教材の活用や児童の活躍の場面を設けるなどの支援が必要であると考えた。

２　あったかサポート

(1)　基本となること

①　姿勢指導

授業開始の礼をする時、担任が図３のグー・ピタ・ピンで繰り返し姿勢指導をした。算数授業だけではなく、その他の授業においても同じように指導した結果、徐々に姿勢を意識して授業開始の礼をする姿が見られた。授業中の姿勢も崩れにくくなり、単元の後半では、担任が良い姿勢をほめる場面が見られた。

グー：おなかと机の間はグー
ピタ：足のうらは床にピタ
ピン：背中は力を入れずにピン

図３　グー・ピタ・ピンで姿勢指導

②　学習活動の流れを示す

導入で学習活動の流れを示すことで、児童は学習活動の順序を把握することができ、安心して授業に取り組む様子が見られた。授業中は、今やっている活動の確認や、これからやる活動を見通すことにつながった。まとめを書く時、担任が指示しなくてもノートを取り出す児童も見られ、次の活動に入りやすいようであった。

③　児童の板書による発表

問題の答え合わせや課題の発表などは、児童が板書したり黒板にワークシートを貼ったりするなど、児童の活躍の場面を多く設けた（図４）。発表の場面になると、発表する児童や貼られたワークシートに集中することが増え、興味を持って聞く態度が見られた。また、これまでの学習では、進んで発表することが少なかった児童も嬉しそうに黒板に自分の用紙を貼りに行く様子が見られ、満足感や達成感を味わうことができたのではないかと考える。

図４　児童の活躍の場面

④　視覚的教材の活用

面積を表す実物大の図形や面積の公式を書いた用紙、視覚的教材などを用意したところ、面積に対する興味・関心を高めることができ、実際に児童が触れて確認する姿が見られた（図５）。「１㎡って、こんなに広い」と広さを実感する声も聞くことができた。面積の公式を書いた用紙は、教室の壁面に貼ることにより、毎時間確認しながら学習する様子が見られ、適用問題に取り組む際には自力解決の手助けとなっていた。

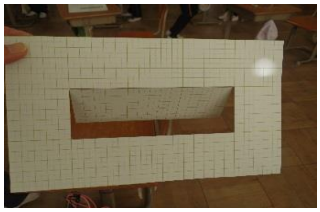


図５　視覚的教材の活用

⑤　担任からの聞き取り

姿勢指導や適切な言葉かけなど、日々の授業で繰り返し支援することがとても大切であることが分かった。特別な準備がなくても、あったかサポートの基本となることを意識しながら支援すると、児童の学習への興味・関心や意欲などが高まった。

スマイルメモとあったかサポートを活用し、児童の実態をていねいに把握したことで適切な支援が考えやすくなった。また、適切な支援を取り入れたことによって児童の学習意欲が高まり、自分の指導の自信につながった。

⑵　不注意への支援

①　フラッシュカードの活用　A-５

学習の導入場面でフラッシュカードを使用し、かけ算九九の確認を行った。第１時では児童は戸惑っていた様子であったが、第２時以降は、意欲的に取り組む様子が見られるようになった。また、授業開始後すぐに行ったことで、授業への気持ちづくりとなり、これまでの導入と比べて活気があり、気分良く授業に入っている様子であった。ビデオによる児童の観察では、授業に入るときの気持ちの切り替えが毎時間の課題であった児童も、最初は興味を示して見ているだけであったが、少しずつ改善が見られ、手悪さが減り、集中してフラッシュカードでのかけ算九九を行うことができるようになってきた。

②　学習形態の工夫　A-10

一斉指導だけでなく、ペアやグループ活動などの学習形態を取り入れた。全体の前で発表が苦手な児童は、グループで自分の考えを発表したり分からないことを聞き合ったりして、全体で活動する時よりも意欲的に関わりながら活動する姿が見られた。一斉指導では活動のやり方や内容を理解することが難しい児童も、ペアやグループでの活動を取り入れたことにより、活動に入るまでの時間が短縮され、活動に参加しようという意欲的な姿が見られた。活動形態の変化により、一つ一つの活動に集中できるようになってきた。

③　付箋紙やワークシートの活用　A-17

付箋紙やワークシートを活用し、１枚に一つの考えを書いたり、１枚に１問の問題を解いたりすることで、自分が回答した問題数の把握ができ、満足感や達成感につながった（図６）。１枚が終了するとすぐに次へ進む姿が見られ、学習への意欲が感じられた。また、考え方の共有をすることができ、自分が考えるときのヒントにしたり、自分の考えを深めたりしていた。

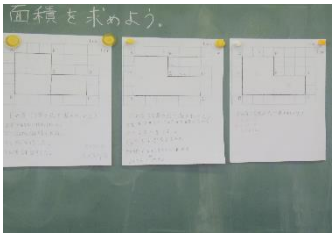


図６　ワークシートの活用

④　児童のノートと同じマスの用紙または黒板を用意　A-19

学習のめあてやまとめは、児童のノートと同じマスを用意して板書した。折り返しなど、ノートと同じにしたことにより、ミスがあった時は早めに気付き修正することができた。また、図７のようなまとめの書き方を示したことで、活動時間が短縮され、適用問題に取り組む時間を十分確保することができた。これまでの授業では、なかなかノートに書き写すことができなかった児童もこれまでよりも早く書き写し始め、周りの児童とほぼ同じくらいに書き写せたことで満足感が味わえたようであった。

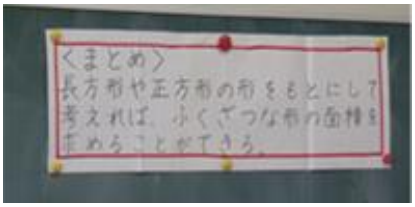


図７　まとめの書き方を示した用紙

⑤　ノートやプリントは担任のところに持って来るように促して丸付け　A-９

担任が丸付けを行うことで、児童の活動について認める機会を増やすことができた。集中し続けることが難しい児童は、担任のところにノートやプリントを持って行き、少し動く時間を確保したことで、問題への取り組み方に意欲が感じられるようになった。ビデオによる児童の観察では、丸を付けてもらった後、すぐに次の活動に入る様子が見られた。また、丸をもらいに来たとき、つまずいている友達を見かけると、立ち止まって教える姿が見られ、自然に学び合う場になっていた。

⑥　担任からの聞き取り

本学級は、スマイルメモの見取りでは、行動特性の不注意にあたる姿が多く見られたため、集中を促す支援を多く取り入れた。短いスパンでの課題の組み立てにより、授業を展開したことは、児童の興味・関心を高め、集中を促すために有効であったと感じた。また、学習形態の工夫により、ペアやグループ学習を取り入れたことは、学び合いの場の確保につながり、児童が意欲的に活動する姿が見られた。１枚に１問の問題を書くワークシートの活用は、集中し続けることが必要とされる活動の時に、有効であったと感じた。また、課題ができたら１問ごとに担任のところに持って来るように促して丸を付ける支援は、児童の学習への意欲を高めるために有効な支援であった。

(3)　多動性への支援

①　授業の流れをなるべく同じにする　B-８

単元を通して、45 分間に四つから五つの学習活動を予定し、その流れをなるべく同じにして取り組んだ。第４時くらいになると、児童の取組の様子に変化が見られるようになり、指示の後すぐに活動に取り組むことができる児童が増えた。

②　担任からの聞き取り

単元を通して、学習の流れをほぼ同じにしたことは、児童が見通しを持って活動するために有効な支援であったと感じた。導入で学習活動の流れを示すと、児童から「この活動は分かる」と安心した様子の言葉が聞かれた。

(4)　衝動性への支援

①　ペアやグループ編制に配慮する　C-21

算数に関する知識・理解、学習への取組、発言力、周りへの配慮の様子などを考慮し、グループ編制を行った。自分から話に加わることが苦手な児童は、グループ編制によって活動への取り組み方に違いが出ることが分かった。毎時間、前時の活動の様子を生かしてグループ編制をしたことによって、グループ活動に意欲的に参加できる児童が増えた。

②　担任からの聞き取り

ペアやグループ編制の際に、活動への意欲や発言力、友達関係などに配慮したことで、一人一人の児童が活躍できる場となった。第１時での編制を基に第２時の編制を考えるという方法で行ったことが、児童にとってよりよいペアやグループ活動になった。

３　スマイルメモの比較

実践前と実践後の児童の実態をレーダーチャートで比較すると、グラフが少し外側に広がったことが分かった（図８）。改善が見られた項目は、「学習課題や活動を順序立てて行うことが難しい」と「集中して努力を続けなければならない課題を避ける」である。また、「気が散りやすい」の項目においても、効果があったと考えられる結果が得られた。フラッシュカードや児童の板書による発表、視覚的教材の活用、学習形態の工夫などを授業の中に積極的に取り入れることが、児童が落ち着いて学習するために必要な支援であることが分かった。

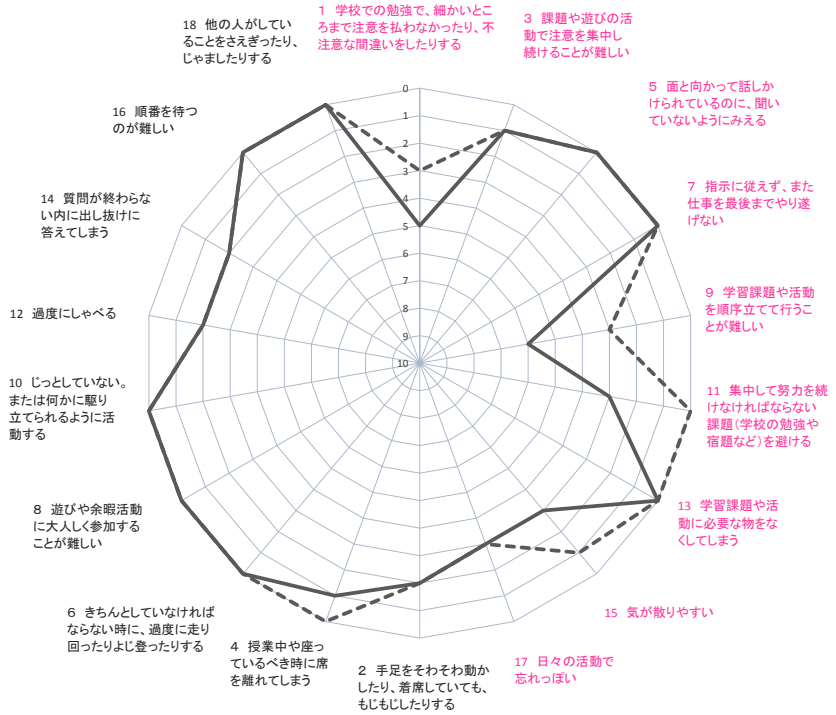


図８　スマイルメモの比較　実線：実践前　点線：実践後

Ⅶ　研究のまとめ

１　成果

○　スマイルメモのチェックシートとレーダーチャートの二つの組み合わせで、学級全体の児童の行動特性を見取って学級の傾向を把握したことは、実態に応じた支援を取り入れるために有効であったと考えられる。

○　スマイルメモを基に、あったかサポートの基本となること、三つの行動特性への支援を取り入れたことが児童の学習意欲の向上を促したと考えられる。

２　課題

○　不注意・多動性・衝動性の三つの行動特性についての児童の実態把握と適切な支援を探ったが、今後も授業実践を積み重ねながら、あったかサポートの支援内容を充実させていく必要がある。

○　他教科や他学年での実践を行い、汎用性を検証する必要がある。

Ⅷ　よりよい実践に向けて

気がかりな姿のある児童への支援については、よりていねいに実態を把握し、行動特性に応じた支援をすることで学習指導の充実を図ることが重要である。

＜参考文献＞

・河村　茂雄　編著　教室で行う特別支援教育１「ここがポイント　学級担任の特別支援教育」
－個別支援と一斉指導を一体化する学級経営－　図書文化（2005）

・月森　久江　編集　教室で行う特別支援教育３「教室でできる特別支援教育のアイディア 172」
小学校編　図書文化（2005）

・佐藤　慎二　著　「通常学級の特別支援　今日からできる！40 の提案」　日本文化科学社（2008）

・黒澤　礼子　著　「発達障害に気づいて・育てる完全ガイド」　講談社（2007）

・梅原　厚子　著　「イラスト版発達障害の子がいるクラスのつくり方　これが基本　子どもが困らない 35 のスキル」　合同出版（2009）

・赤石　賢司　編　特別支援の算数授業づくり「ADHD の子を巻き込む算数授業の勘所　明治図書（2008）

＜担当指導主事＞

矢野　勉　　城田　謙司